

大崎短歌会

兼題「れんげ」

こんなにもきれいに咲いてれんげ草
耕作やめる狭の山田に

本後淑子

桜山のれんげ畑に大はしやぎ

長重悦子

一年生の一日遠足

ひろびろとれんげ田のぞむ高台に

上南紀子

みつ蜂の箱並びてありし

菜の花と紫雲英の市松模様をば

通学列車の窓より眺めき

原田葉子

吾を待つ野田を歩みて花さがす

何処に咲くやれんげの花よ

実吉安仁

駅弁を開くれば窓に開けゆく

れんげ田は我を旅に誘う

山下海征

れんげ田でかくれんぼして遊びし日

あの日の友も今は少なくて

坂元つる子

早期田の肥料となりてれんげ草

花を待たずに鋤き込まれけり

穂園芳江

短歌芳し白寿迎える穂園氏へ

れんげ草編みし指輪ネックレス

馬場みさ

薩摩郷句

兼題「マスク」

マスク無し 大声で飲んが 後日が心配

(唱) クラスタードが 発生らんな良どん

二見愚楽満

大蒜の臭せ マスクん中が 狼狽っ

(唱) 我が息じゃばっ 苦し事あつ

上村牛歩

苦しかち マスクは度度 鼻ん下

(唱) 年中友人かい 注意を受けつ

諸木小春

マスク顔れ 慣れつ外じたや 泣つ出せつ

(唱) 泣かんで良かが 婆ちゃんだがね

長重リリー

風邪ひつも マスクん陰で ならじ済ん

(唱) 寄り付かならん インフルエンザ

満石うらら

無精者れ マスクは便利 化粧もせじ

(唱) 眉毛どんパツ引つ 気楽き出掛けつ

西ノ園ひらり

球打つも 苦しマスクで 的外れ

(唱) 球も見えんし 邪魔めないマスク

北村虎王

マスクどま うっ捨ごちやつた こん暑さ

(唱) 熱中症どみ ない前外そ

上窪小絵

喋繰い婆 マスクをしてん 騒がらしゆし

(唱) 少と黙れち 誰もえ言わじ

藤元鬼瓦

マスクどん 着てかい愚痴い 小心者

(唱) コロナが恐じし 文句の前へマスク

遠矢耐多

21年度の南日歌壇賞を 山下海征さんが受賞



南日本新聞に21年度に掲載された俳句・短歌の中から年度賞が決まり、野方の山下海征さんが南日歌壇賞(高野公彦選)を受賞しました。

同新聞社には年間多くの作品が寄せられており、短歌においては、選者3名がそれぞれ選考した作品が掲載されています。

今回、山下さんの1首が、選者の高野公彦先生が昨年度中に選んだ約240首の中から年度賞として選ばれました。

「たまらなく 旅に出たき日 リュック負い
梅の畑で 握り飯食う」

この歌は、山下さんが「ちょっと出かけたいな、自然に触れたいな」と思い、ご自身の梅畑に行ったときのことを詠みました。

姉の本後淑子さんの影響で50代の頃に短歌を始め、身の回りの自然や梅仕事などを詠むことが多いそうです。

短歌は山下さんにとって“生の証”であり、「自分の感動が衰えない限りできるだけペンを握っていたい」と話されました。